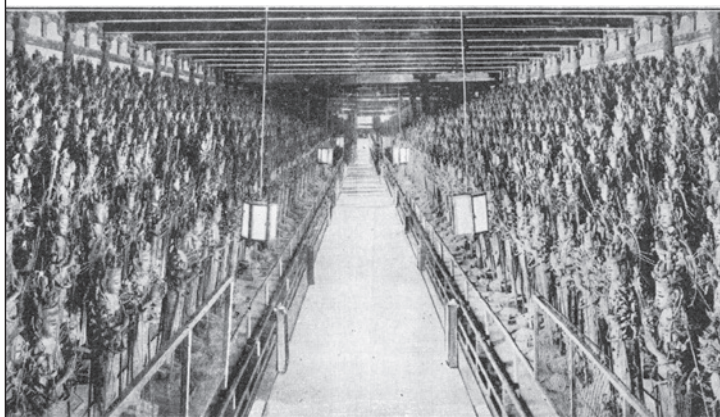


鴨東通信

春

2017.4 No.104



● 日常語のなかの歴史17
えほう【恵方】

梅田千尋

● てい・たいむ

『御堂関白記』が記憶する栄華

—— 藤原道長の実像にせまる

大津透・池田尚隆・磐下徹・黒須友里江

● エッセイ

「海賊」行為が切りひらくもの

—— 近代ベトナム美術の場合

台湾茶文化探訪記

王 静

〈特集…一五〇周年！ 日欧交流の夜明け〉

日本・デンマーク文化交流史の諸相——明治時代

一八六七年パリ万国博と日仏交流

—— ジャポニスムの端緒

長島要一
寺本敬子

● 史料探訪65

徳川慶喜への不満——大政奉還と渋沢栄一

関根 仁

● リレー連載

世界のなかの日本研究25

オリンピックは日本文化の救世主か

前崎信也

えほう【恵方】

ついに、巻き寿司のノルマ販売という社会問題に至った節分の恵方巻である。

チェーンストアの広報活動によつて近年創られた年中行事であることなど、昭和生まれの者には自明である。しかし、現在の大学生のなかには伝統行事として認識している者も一定数いるようで、伝統の創出について考える教材として、なかなか使い勝手がよい。

寿司の趣向はともかく、「恵方」という方位については、各社広報も扱いあぐねているようだ。今年のコンビニのチラシでも「北北西」もしくは「北北西少し北」と表記が分かれていて、「少し北」という不自然ながらも誠実な表示を試みる店には好感をもった。

恵方の背景には、年月日の干支に合わせて一定周期で神々が周回するという陰陽道由来の方位の神への信仰がある。恵方は、そのうち歳徳神としとくじんの居場所を指す。方位の八将神はしょうじんは普請や移動を阻む凶神揃いだが、ほぼ唯一、無条件の吉方を示す

日常語の歴史 なかの

17

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

歳徳神の方位が「明きの方」として信仰され、年神棚や寺社への恵方参りとして定着した。

そして、『暦林問答集』などの中世陰陽道書では、歳徳神は木火土金水の五行の徳を体現する神として、年の十干に対応して甲・庚きのえ・丙ひのえ・壬みずのえの方位を移動する。これらの方位も曲

者で、十二支の十二方位に、十干じゅうかん（己・戊を除く）と乾・坤・巽・艮の四維を加えた二十四方位に基づくから、現在用いられる十六方位とは一致しない。丁酉年の今年は、丁と対峙する壬みずのえの方（亥と子の間）が恵方となり、結果「少し北」というもどかしい表現が生まれることになる。

忘れられた方位の神と、現在とは体系の異なる方位表示。近代以降いったん衰退した恵方が、なぜか復権したことで、改めて身近に現れることになった。陰陽師といえは、戦う霊能者。そんな想像上の陰陽道とは異なる、生活の中に浸透した信仰文化としての陰陽道を想起する機会になりうるだろうか。

（梅田千尋・京都女子大学文学部）

——藤原道長が「この世をば……」と栄華を詠った寛仁二年（一〇一八）からおおよそ千年の時を刻みつつある本年、道長の自筆日記『御堂関白記』（二〇一三年ユネスコ世界の記憶、陽明文庫蔵）のエッセンスを凝縮した「藤原道長事典」が刊行されます。このたび事典の編者、執筆者のみなさまにお話をうかがいました。

●御堂関白記と出会う

——まず編者の大津先生と池田先生に、事典の制作経緯と特色からうかがいます。

大津…はじめに制作の経緯からお話しすると、もともと山中裕先生（一九二一―二〇一四）による『御堂関白記』を読む集中講義（第一回は一九六八年、於平安博物館（現・古代学協会）があり、一九八一年からは東京で、さらに京都でも研究会がひらかれ、『御堂関白記』を読んできました。その成果を『御堂関白記全註釈』として出版することになり、一九八五年から刊行がはじまり八冊を出したところで一時中断がありました。二〇〇三年からは思文閣出版で後半の八冊を刊行しました。さらに二〇一二年に寛弘六年の改訂版を出した段階で一応終わった

ていーたいむ

『御堂関白記』が“記憶”する栄華 ——藤原道長の実像にせまる——

おお つ とおる
大津 透

いけ だ なおたか
池田尚隆

いわした とおる
磐下 徹

くろ す ゆ り え
黒須友里江

（東京大学文学部教授）（山梨大学教育学部教授）（大阪市立大学文学部准教授）（東京大学史料編纂所助教）

わけです。そのときに註釈の索引があったら便利ではないかという声がありまして、註釈の訂正もふくめてより発展させた事典形式のものをつくろうかという話になったのです。

それで二〇一一年度から国文学研究資料館で特定研究というかたちで、研究会を続けながら項目を選定するという作業をさせてもらったのですが、それがこの事典をつくる上では一番重要で、ここに集まっていたいた磐下さんや黒須さんをはじめ、若い人たちに分担して項目の選定をしてもらった。事典はやはり個人でつくれるものでもないし、出版社の協力などいろいろな力があって最終的に完成までこぎつけました。残念ながら山中先生の生前には刊行できなかったのですが、先生の遺志を偲ぶかたちでの出版ということになっています。

●事典の特色から浮かび上がる道長像

大津…通常の事典と違って、註釈をもとに項目を選んでいくというのは、ようするに『御堂関白記』に出てくる項目を、事典に採るということです。だから普通に平安時代の事典をつくったら必ず出てきそうな項目でも、『御堂関白記』



池田尚隆氏

さらに、若い、優秀な人たちが尽力してくれたものですから、そこでもまた新しい優れたものが生まれてきていると思います。

——「政務・儀礼」などで項目選択や執筆を担当された磐下先生と

またもうひとつの特徴としては、大勢の執筆者が、山中先生の学問指導を受けて、歴史専門の方と文学専門の方という、普通ならなかなか一緒にならない人たちが協同してやっているということがあります。本事典の特色ともなっているわけですが、これが道長の多面性を見せることにつながっているのではないのでしょうか。

池田・網羅的な事典ではないということですね。平安時代のことを調べるために利用する事典というより、むしろ「読む事典」と考えていただいたほうがよいのでは。この事典を読むことによって道長の全体像とか、人生が立体的に浮かび上がってくるような特徴がある。



大津透氏

に出てこないものは出てこない、というのがひとつの特色です。したがって、道長や平安貴族社会にとって意味のあることが書いてある。



磐下徹氏

読みづらいところがあると思うのです。だからそういう人たちにとつての入門書というか、初学者にも『御堂関白記』を何とか読める手助けになるような事典にしようという意識で執筆していました。項目の選定も、自分が『御堂関白記』を読みはじめたときに、どういうところがわからなかったかとか、こういう言葉のニュアンスをとらえるのに苦労したんだ、とかいうことを念頭において選んだつもりなので、そういう点で初学者向けの事典としても使ってもらえると思います。

黒須…道長独特の言葉遣いというか、一般的な辞書をひくだけでは意味がとれないような部分が

『御堂関白記』には結構あり、項目執筆のために調べているなかでやつとわかってきたり気づいたりすることがたくさんありました。一般的な定義にこだわらない言葉遣いがみられることが、読者の

黒須先生はいかがですか。

方々にもおもしろく思っていたのではないかなと思っていました。

池田…たとえば「にようほう」という言葉。「女方」と「女房」、両方の表記があります。身分の高い主人に仕える女性たちを普通、女房というわけですが、道長は妻の源倫子にたいしてもこの言葉を使っています。大量に出てくるのですが、道長以前には珍しい用例です。現代では奥さんを「にようほう」と呼ぶのは怒られるのかもしれませんが(笑)。

磐下…そういうことは単に平安時代史の事典を読んでもわからないですね。

大津…一九八五年に『全註釈』の第一回の配本をしてから三十年ちよつとですけれども、平安中期・摂関期の研究が非常に進んだ時期と重なります。このたび事典をつくるにあたって、より詳しくわかるようになったことが結構あって、その成果がとくに反映されている「政務・儀礼」や「官司・官職」の分野については、非常に意義があると思います。

磐下…制度として決められた手続き以外の天皇と道長、ほかの公卿とのやりとりの事例というのは、なかなかほかの儀式書や概説書には出てこない。そういったところを拾いながら、記事に基づいて執筆されている点が、この事典の醍醐味だと思います。

普通の事典だと一般的な記述を旨とするので、ちよつと例外的なものとか、イレギュラーなものとかはあまりふれずに書かれます。ところがこの事典では、むしろ道長がこういうことを書いてお

いるとか、それを中心に解説文が書かれている箇所もあるので、そういったところはひとつ読みどころかもしれないですね。

大津…除目(じょもく)の項目には、受領(ずりょう)人事で一条天皇がこの人がよいといったのを道長とそこにいた公卿が反対して、結局保留となったということが書いてあります。人事権は天皇にあることになっているのですが、公卿をおしとどめたというのは、ほかの記録にはみえない除目の実態がわかるめずらしい例です。また合議の陣定(しんちやう)を道長は積極的に開いていて、道長は一行くらいしか書いていないですが、陣定のなかでも受領功過定(ずりょうこうかたがた)とか諸国申請雑事定などを拾っていくと、日記には結構出てきます。また受領の人事についてはかなり詳しく書いてあって、どこに道長の関心があつたかということを読みとくうえでは、重要ではないでしょうか。

儀式がどうやって行われるかということは、当時の貴族には常識なので、日記自体には記録されないものです。日記に書かれていることを理解するためには儀式書などをきちんと調べて知っている必要があつて、そのために辞書をひくことになりましたが、しかし実際は、儀式の実態は辞書を読んだくらいではなかなかかわからず、使いものにならないことが多い。この事典の場合、具体的な儀式の事例がわかるという点で、役に立つでしょう。

——事典の項目を選定する過程で気づかれたことは……。

黒須…人名についていえば、選定できなかった人物もたくさんいます。登場回数(かいすう)が七回以下の人物は大幅に削らざるをえず、道長との関係、道長の家司(けし)であるなどこの事典の項目として書いてお

もしろいと思われる人物を採るようにしました。頻度の高い人物という点でもおもしろかったのは、大臣や大納言、中納言といった高官がよく出てくるのは貴族の日記として当たり前ですが、それに加えて倫子と彰子・妍子（道長娘）が上位に入っていること。特に彰子は二六〇回以上登場していて一位でした。こういったことは、選定作業のなかで頻度順に並べてみてわかったことです。

――家族の名前の頻度が高いというのも特色といえますか。

池田…そう思いますね。ほかの日記では家族のことはそんなに出てこないですよ、政務のことが中心で。しかも回数が多いだけではなくて記事も詳細です。

たとえば最初のころ、長保元年あたりは簡単な記事しかないのだけれども、彰子入内（じょうしにりうち）のことは順を追って丁寧に書いています。それから最初に『御堂関白記』のなかで詳しい記事が出るのは寛弘元年の頼通の春日使の箇所。あそこは和歌が入っていることもあって『御堂関白記』が展示されるときには必ず出るところです。さらに威子（道長娘）が女御代（にようごだい）として大賞云御殿（だいじょうぐんごてん）に出たときとか、後一条天皇の元服、それからちろん威子の立后（りゅうこう）などとはとにかく詳しい記事がありますよね。だから回数もそうだし、頻度もそうだし、記事自体が家族について書くときはものすごい量になる。これは、ほかにない特徴だと思います。それをどう考えるかというところですけれども、家族が彼らにとっては我々とは違った意味で重要な存在であったということがひとつありますよね。たとえば娘が天皇と結婚して子供を産むということが、自分の権力に直

結するわけですから。それから息子たちが立派になって要所要所に官人としていけば、自分の地位も安泰になってくる。そしてその自分の子供とか孫とか、子孫たちがどういう風な状態であったかということが、後々のその人の評価に直結するのです。そういうことから家族というのは重要であったと思うのですけれども、でもそれはそうとして、ここまで具体的に書き留めているのは、この時代では道長だけじゃないですかね。

磐下…政務の側からいうと、道長の娘たちがよく日記に出てくるというのは中宮だから重要だということになり、それにともなう行事や儀式というのは必ず行われますので当然記録として残る。だから単に娘だから書いたというのではなくて、娘が天皇の后であるという、ある意味では道長家の特殊性というのか、そういうことがあって日記に頻繁に出てくる。同じ文脈で娘たちを補佐する奥さんの倫子も出てくるという面はあると思います。

池田…いずれにせよ、それを書くかどうかということはまた別問題で、表の世界のことではないわけですよね。建前として道長は官人であってそちらの仕事が社会とかかわりであるわけで、後宮（きこう）がどうのこうのというのは裏の世界です。それが書かれている、あるいは家族愛で書いてあるとすればもっと内輪の世界ですよ。そういうことが書かれているということ自体が、ひとつおもしろいというか、道長の性格を示していると思います。

大津…自分の娘が女御代になった、それにともなって新たな儀式をつくるということがあるのです。それがとても詳しく『御堂関

白記』には書いてあります。新しい文化事業をおこしていくことに、道長はかなり意識的にとりこんでいると思うので、その結果として、普通なら出てこない女性の世界が非常にたくさんみえてくるわけです。家族愛だけの問題ではなく、政治家の仕事とか文化的な役割意識があるのではないのでしょうか。

普通の道長像というのは、道長を外から書いている史料によって描かれていて、藤原実資の『小右記』が記している見方が中心で——少しバイアスがかかっているかなと思われますけれども、『御堂関白記』をみていくと道長は、実資がいつているほど勝手なことをやっているわけではないという気はするのです。

ただ、陽明文庫に『御堂関白記』が一年分だけ残っていますよ、長和三年が。ほかは全部古写本か自筆本で残っていて長和三年の上下二巻だけないことについては、倉本一宏さん（執筆者の一人）がいつているみたいに、のちの世に残せないような、三条天皇との対立や批判などいろんな問題があつて、道長自身が捨てたのかもしれない。

磐下…これは後世に残さないほうがよいというふうに、どこかに書いてあったんじゃないかなったのでしたっけ。

大津…そういいながらも残っていくわけですよ。

池田…本当に残せないから捨てた……。

大津…私はそうみています。

——鍋バーティーがあつたという記事も……。

大津…そうそう、一条天皇のときです。そのあとみんなて天皇に

ついて後宮まで行つたという記事があつて。

池田…あとのついで薨次ですね。寛弘元年のことですね。

大津…一条天皇のあの時期だけやつていたもので、冬に鍋バーティーを清涼殿の裏で近臣だけでやるんです。そういうことはあまりほかの時代には聞かないことで『古事談』にまで語り継がれているわけですが、公卿一人が料理当番となり一条天皇と道長と近臣たちが和氣藹々わきあいと鍋をつつくことをやつたという。たしかに寛弘の前半だけですよ、出てくるのは。あるときは酔っぱらつた天皇が中宮彰子のもとまで行つてしまい、みんなでつき随つて行つたとか、そういう後宮と近臣たちの一体感みたいなものを示す例が日記に出てくるんです。

『御堂関白記』は実物を見ればわかるように、三行くらいのスペースに記事を書くのでそんな長くは書けません。長い記事は裏書うらがとしてはいるわけですけども、そこにわりと文化的なことが多く、詳しく書かれていて、たとえば大嘗祭のときの女御代の御禊行列や、寛弘三年三月の花宴はなのえんなどですね。そういうところはやはり道長の、歴史をつくつていっているとか、のちの世の先例となるようにつくつていっているみたいな意識が、はつきりとあらわれているという感じはしています。そういう点で彼の文化的な役割もかなり大きいと思えます。

——「花宴」といえば、『源氏物語』の下地になつたとも言われています。

池田…山中先生の説ですよ。それと近いものでは仏教関係の記

事があります。たとえば浄妙寺供養は寛弘二年に詳しく書かれています。詳しくなくてもたとえば父兼家のための法興院ほこういんの法華八講の記事は多いし、姉詮子のための慈徳寺の法事など、毎年必ず書くような感じがあります。なかでも法華三十講は道長が初めて盛んに行ったわけで、深い関心をもつて、しっかりと新しいことをやっていくという意志を感じるし、実際『御堂関白記』にも毎年のように記事があるわけですから、これも文化面ということでも共通するのではないのでしょうか。

大津…法華三十講は道長が毎年行ったというのは、多分画期的なことです。法華八講は道長が始めたわけではないのでしょけれども、やはり供養として非常に盛んに行ったのが道長であることは間違いないし、『栄花物語』も後半は法成寺ほうじょうなど仏教関係の記事が中心です。有名な金峰山詣きんぽうさんぎの経筒埋納きやうづつについても、これ以前に全く例がない。経塚が流行するのは院政期になってからで、道長の段階ですごく新しいことだったのは間違いないけれども、経塚の研究のなかでも浮いてしまっている。日記が完全に存在して、間違いなく現物もあって何のためにやったのかは願文がんぶんに書いてあるのに、実はよくわからないのです。最先端の文化なのかもしれません。

●アップデイトされる平安貴族社会と道長像

——『御堂関白記』は文学的な作品ともいえますよね。将来、これをもとにした小説や大河ドラマもでてくる可能性も……。

池田「これまで『御堂関白記』は史料としてしか使われてこなかったわけで、それを読み込んでいくと時代の呼吸みたいなもの、あるいはさまざまなことに対応するときの姿勢みたいなものがある。出てきて、文学作品とまではいわないけれども、事実をひっぱりだすというより『御堂関白記』自体を読んで評価するという、そんなやりかたが、これからは可能になってくると思います。

磐下「『御堂関白記』の研究会で、あるとき山中先生が、自分たちは『御堂関白記』を一生懸命翻刻して読んで意味をとっていくということをやつてきて、ようやくそれが完成というか到達点に達したのだから、これからはもっとこれを使つてひとつひとつの細かいことを、どんどん研究していかなければいけない、そうすると道長や摂関期の新しい研究というのがどんどん発展していくはずだから、『御堂関白記』を使っていくことが大事なんだと仰つていたのを憶い出します。山中先生は五十年、六十年かけて、『御堂関白記』というのをある程度、日本史の勉強をした人なら読めるものにした、そういう地ならしをされてきた方ですよ。だからそれをうまく使つて新たな研究をしていかなければならないというのをそのときにすごく思つたので、記憶に残っています。

そういう意味ではこのたびの事典というのはまさに、『御堂関白記』に出てくるひとつひとつの言葉を丁寧にとりあげて解説をしていくという、新しい研究の第一歩として位置づけられるのではないのでしょうか。

(二〇一七年三月一九日 於東京大学)

「海賊」行為が切りひろくもの——近代ベトナム美術の場合——

二 に 村 むら 淳 じゅん 子 こ

JASRACが音楽教室から著作権使用料を徴収する方針を固めたというニュースが、音楽教育に携わる友人を激怒させている。

「著作権の徹底は、音楽の発展に寄与するのか?」、「知的所有権は、誰のための権利なのか?」、「オリジナルであることは、文化の創造の核心なのか?」東洋の場合は、云々、……」コーヒーを飲みながら、そんなことを彼女と話しているうちに、「そもそも、近代の欧米で確立されたモダニズムの価値観はアナクロ。これって、いつまで有効?」というところに辿りついた(最近、誰とどんな話をして、辿りつく場所は同じだ)。

振り返ってみれば、「合法」という価値観への揺さぶりは、二一世紀に入ってから一層激しくなったように感じられる。インターネットの普及とともに育った「著作権侵害世代」の子たちは、無料でダウンロードを繰り返し、CDは買う対象ではなくなつた。アートに関しても、美術という制度への抵抗を続ける「違法アーティスト(たとえ、結果的に制度に取り込まれてしまつても)」たちが、芸術と違法行為の境界線を攪乱させている。

こうした「違法」行為は、しばしば「海賊」行為と呼ばれてい

る。だが、海賊(Pirate)と、私掠者(英privateer, 仏corsair)は似て非なる存在だ。同じ略奪でも、権威者からライセンスを与えられているのが私掠船。与えられていないアウトサイダーが海賊船。てっとり早く言えば、合法か非法かは、権力の問題。

帝国主義・植民地主義は、覇権的権力を後ろ盾として「合法的な略奪を行ってきた。私の専門である東アジアの美術に関して言えば、フランス植民地下のベトナム美術がその産物だ。フランスの教育者たちは、「美術」という概念と「応用美術」の実践をベトナムに持ち込み、美術学校(L'Ecole des Beaux-Arts de l'Indochine)を一九二五年に創立させた。表向きは「文明化」だったわけだが、西洋のアカデミー的な芸術理論を導入することは、ベトナムのギルド的な職能集団を弱体化させ、彼らの技術を巧みにフランスの支配下に置くことを意味した。勿論、ベトナム工芸品の海外輸出による財政強化をはかるためだ。ベトナムの視覚文化や工芸などは、フランス語の「美術」のロジックに従って再編成され、そこから排除されたものや、デザインと作業の分業ができないものは切り捨てられる運命にあった。つまり、芸術の分野

において、私掠的な略奪が行われていたと言える。かくして、作品には署名が入るようになり、オリジナルであることが秀逸とされ、「写し」といった類の概念に否定的なニュアンスが加えられていく。

フランス人たちは、日本の殖産興業を生産モデルとし、フランス式の「応用美術」を軸に、ベトナムを、日本を凌ぐ美術工芸輸出大国に育てようと苦心した。だが、実のところ、フランスよりも、ベトナムのほうが一枚上手な海賊だった。

厳しいデッサンの修行を積んできたベトナム学生の間ほとんどは、デッサン教師や、工芸品デザイナーとして雇われたが、画家という存在への憧憬も捨てなかつた。そして、植民地下、「美術」という霸権的な概念への密かなる抵抗を続けた。そのひとつの成果が、「漆画」という、西洋出自の油画とは異なる絵画メディアの誕生だ。高温多湿の気候にも適し、油画以上の耐久性を持つ漆画。工芸でも美術でもないその表現は、美術アカデミーという権威からみれば、その枠内に適法しない、ある意味、「違法」と「合法」の間に存在する。

また、フランスに渡った絹画家のマイ・チュン・トゥ（梅忠恕／Mai Trung Thu, 1906-1980）らは、「美術」の中心ではなく、その行間において制作することによって、権力者の検閲の目を逃れ、西洋の美術市場に参画した。彼が多く制作したのは、「偉大」や「壮大」という男らしさとは対極的な、買い求めやすい小さなサイズの絵画や、工芸・装飾と一体化したような作品である。純

粋な装飾品でもなく、純粋な美術品でもない、その二つの領域の「間」のものを制作する行為は、多分に「海賊」的であり、周縁から美術を刷新していく試みに見える。フランスからみれば、彼は、画家と応用美術家の間にいる曖昧な存在だっただろうが、東アジアを視座にすれば、彼は、「美術」の周辺にさまよっているがらも、そこから排除されてしまったものを掬い上げていた抵抗者として位置づけることができる。遠巻きに眺めれば、ベトナムの近代美術は、略奪・拿捕と権力からの出奔が織り成して出来上がったものだと言っている。

近代ベトナム美術に関する拙稿は、稲賀繁美編『海賊史観からみた世界史の再構築』に収録させていただいた。この書籍は、文化交渉や交易における「海賊行為」を総合的に再検討することを目的とした報告書で、まるでカレイドスコープのように、「海賊」という概念をめぐる、テーマも分野も異なる様々な事象を覗かせてくれる。この書籍自体が、高揚感あふれる海賊船そのものであり、編者・稲賀繁美の驚くべき船長の資質が発揮されているのが面白い。

十六・十八世紀に出現したかつての海賊たちは、退廃した欧州社会と大航海の時代に必然の存在だった。見通し悪く、行き詰まっている今だからこそ、義侠心溢れ、新しい風を運んでくれる「海賊」の出港に期待したい。（鹿児島大学教育センター講師）

▼35ページに書籍案内を掲載

台湾茶文化探訪記

二月に拙著『現代中国茶文化考』を刊行した。本書は、一九四九年の建国から今日まで中国という国が茶文化をつくりあげながらも同時に茶文化によって国がつくられてきた過程を跡付けようとしたものである。中国の茶文化構築には、台湾の茶文化、とりわけ台湾茶芸が大きく関わっていたことから、執筆にあたり台湾でも資料収集をおこなっていた。当時お世話になった先生方に著書完成のご報告とご挨拶をしようと、三月中旬に久しぶりに台湾を訪問した。

初日の夕方、ホテルに到着してすぐ台北在住の友人が予約してくれた台湾料理の有名な店に向かった。満席の店内には観光客らしき顔が多い。席に案内され、まだ注文もしていないのに、ウーロン茶入れの真っ白な陶器の茶壺と茶杯が運ばれてきた。この当然のように出されたお茶に私は大いに満足し、台湾といえ、やはりお茶だと実感した。少し前になるがタレントの木村拓哉が台湾観光局のテレビCMに出演していたことをご記憶の方もいらっしゃるかもしれない。台湾を紹介するシリーズもののCMであったが、そのなかのひとつで、彼が緑溢れる自然の水辺で茶道具を

王^{おう}静^{せい}

広げ、茶芸の作法にしたがってゆったりとお茶を飲むシーンが、とくに印象に残っている。台北や九份^{きゅうふん}の有名な茶芸館で様々な種類の中国茶を味わい、お土産にはお茶や茶道具を購入する。台湾といえ茶というのは、いまや台湾を訪れる人にとってすっかり定着したイメージであるといって間違いない。

しかしながら、台湾と茶のいまのような結びつきが、比較的新しいものであることは、存外知られていない。もちろん台湾の人々も日常的に茶を飲んではいたが、歴史的に台湾では茶葉は主に輸出として栽培されていたため、地元の人々の飲用に供されるものは質も低く、また茶の茎や屑などの商品にならないものがほとんどであった。いまのように茶を飲み、しかも茶を飲むという行為が茶芸という芸術にまで昇華されたのは一九七〇年代に入ってからのことにはすぎない。当時の台湾は、経済発展による豊かな都市中間層の出現と、西洋式のライフスタイルの浸透という社会変容の渦中にあった。同時期の中国では文化大革命によって伝統文化が否定されていたこともあり、台湾側では、自らのアイデンティティを確認し中華文化の正統性を獲得すべく「中華文化

復興運動」なるものが推進された。また、この頃から政治的な理由で台湾の茶葉輸出が激減したことによって、台湾内での茶葉消費市場の開拓が茶葉産業にとつての死活問題ともなっていた。このような状況の中で、豊かな中間層を中心に茶が台湾内で消費されるようになるとともに、淹れ方や飲み方を作法として洗練した芸術的な台湾茶芸が、中華の伝統文化として構築されたのである。

台湾訪問の二日目は、茶芸館めぐりの予定だった。観光客がよく行くような場所を避け、偶然に出合う「ホンモノ」の体験を求めてホテルを出た。しかし、私の期待はすっかり裏切られた。なんと茶芸館を見つけられなかったのである。本当に台北に来ているのかと感じるくらいの驚きだった。傍らの店でどこかに茶芸館はないかと尋ねてみたところ、返ってきたのは、最近茶芸館に通わず、茶は家で自ら淹れて飲んでいるとの答えだった。なんでも以前はよく茶芸館に通っていたが、外国産の茶葉を台湾産として売り出すなどの「事件」もあったため、お茶好きの台湾人はみな自分で産地に出かけて上等な茶葉を購入し、茶道具を揃えて家で楽しむようになったという。このことについてはあらためて検証する必要があるが、町で茶芸館が少なくなっただのは確かである。

観光地ではない普通の町で茶芸館と出会えなかったのは、茶文化が衰退したというわけではなく、人々がそれを完全に家庭にもちこみ、日常化したと考えたほうが妥当であると思う。そう思っただけであらためて町中を眺めれば、そこかしこに茶の存在を見いだす

ことができる。たとえば昼食をとりに入ったごく普通のレストランですら定食に付いているデザートがウーロン茶のゼリーで、しかも台湾の茶業界ではよく知られた人物が焙煎した茶葉で淹れた茶を店内で飲むことができた。あるいは街中のコーヒーストップにすらメニューには茶があることに気づいた。茶はすでに日常的な文化として、食事やほかの飲み物とわざわざ区別されることなく、一体となって受け入れられているのだらう。

過去四十年の間に、台湾は政治的・経済的・社会的に大きく変容した。茶文化ももちろんそれらの変容とは無縁ではない。そもそも茶が日用の飲料となり、文化として意識されるようになったのも、茶をとりまく環境が変わったことによるものである。茶が台湾を象徴するものとして自らを輝かせながら、同時に、目立たなくなるほど日常化している様子を、わずか二日間の台湾滞在で垣間見ることができた。文化とはこのように定着していくものなのだらう。茶は、現在の台湾において確かに遍在している。

(大阪観光大学専任講師)

王 静 著

二月刊行

現代中国茶文化考

▼35ページに書籍案内を掲載

エッセイ

日本・デンマーク文化交流史の諸相——明治時代

ながしま よういち
長島 要一

二〇一七年は日本とデンマークの間に外交関係が樹立されてから一五〇周年にあたり、両国でさまざまな記念行事が催されている。

新暦で一八六七年の一月二二日に、デンマーク政府代理のオランダ公使ポルスブルックと徳川幕府の外国奉行三名が署名した修好通商航海条約は、同年一〇月一日に批准された。徳川幕府が締結した一一番目で最後の条約となったが、徳川慶喜が署名押印した見事な体裁の批准書は、日本に保存されていたものが関東大震災の時に消失してしまっていた。記念の年に、デンマーク側の批准書の複製が大日本印刷の驚嘆すべき先端技術によって作成され、この秋国立公文書館で開催される記念展示会で公開される。

条約が結ばれて最初に実現したプロジェクトは、デンマークの大北電信会社が上海—長崎—ウラジオストク間に敷設した海底電信ケーブルで、これによって明治日本は国際社会に電信でつながれ、近代化の道を邁進することになった。

大北電信会社の長崎支局には優秀なデンマーク人の青年が電信士として勤務していたが、中でもウィリアム・ブラムセンは趣味

だった古銭収集がきっかけとなって貨幣に書かれていた文字を読むために日本語を習得し、年代を西暦で特定するために和洋対照表を自力で編んで日本語版を丸善から出版したりしていた。日本学に貢献すべく期待されていたが、三一歳の若さで夭折した（拙著『大北電信の若き通信士』長崎新聞新書、二〇一三年参照）。

岩倉使節団が国賓として一八七三年四月にデンマーク王室を訪れて以来、日本の皇室との間には友好的で親密な関係が今日に至るまで保たれている。明治時代だけでも伏見宮と小松宮殿下がデンマークを訪問し、ヴァルデマー殿下が来日して両国親善に貢献していた。

当時のヨーロッパを席巻したジャポニズムの波はデンマークにも及んで、美術の分野、特に陶器の絵柄や色合いに影響を与え、ロイヤル・コペンハーゲンの飛躍もそれを梃子にしていた。

アンデルセンの『即興詩人』が森鷗外によって創造的に誤訳されて日本の読者を魅了し、童話が日本人の心を掴んできたことは周知の通りである（拙著『森鷗外』岩波新書、二〇〇五年、『あなたの知らないアンデルセン』全四巻、評論社、二〇〇五年参照）。

人物交流は文化交流史にとって大事な要素だが、特筆すべきは、日露戦争の海戦に活躍した帝国艦隊に最新鋭戦艦を納入した武器商人ミュンターの妻ヨハンネが結んだ石井筆子との友情である。ヨハンネは筆子の抱いていた婦人参政権獲得の夢を、帰国後にデンマークで実現したのだった(拙著『明治の国際人・石井筆子』新評論、二〇一四年参照)。

日露戦争前にデンマークには野口英世が血清研究所に一時期滞在して研究活動をしていたほか、岐阜出身の芸人たちがコペンハーゲンの動物園で日本村を作り、踊りや相撲、鵜飼を披露して日本を紹介していた。その中に小柄な女性花子がいて、のちにパリでロダンに見出され彫刻のモデルになっている。

忘れてはならないのが、デンマーク聖書学校校長で、日本のキリスト教の現状を視察するために一九一一年に日本を訪れたスコウゴー・ビーターセンである。「西洋の没落」が語られていた当時の欧州はやがて第一次世界大戦に突入するが、そんな状況の中でキリスト教の将来を危ぶみ、日本に宣教師を派遣する意義を探りに彼は来日したのだった。日本語のできたデンマーク人宣教師ウィンテルを通訳にして九州から東に向かい、各地でキリスト者のみならず、仏教関係者、東京大阪の市長、大隈重信などにもインタビューを行ない、意見を交換した。

ほとんど予備知識なしで来日した彼は、先入観がなかった分、自己の文化的背景に染められた偏見から免れておらず、帰国直後に出版した印象記『現代の日本から』にそれがうかがわれる。け

れども、明治末年のいわば「代表的日本人」たちの生の声を記録した同書には、雑然とした日本の宗教界、文化環境が未消化のまま描写されコメントされていて興味が尽きない。詳しくは昨年夏に思文閣出版から発行された拙著『デンマーク人牧師が見た日本——明治の宗教指導者たち——』を参照していただきたいが、その末尾で言及しておいたウィンテルがデンマークで出版した小冊子『虐げられた者たちの友、賀川』について補足しておきたい。

ウィンテルは一九一一年にスコウゴー・ビーターセンとともに、のちに社会運動家として名を知られるキリスト教徒賀川豊彦(当時はまだ学生であった)に、神戸の新川で出会っており、後年賀川が世界旅行の途上でデンマークを訪れ講演を行なった折に、彼の案内と通訳をつとめたという事情があった。

全部で九三ページの図書の内容は、前半が賀川の家と少年時代、神との出会い、逆境、活動の場新川、奉仕の始まり、結婚、社会事業、著述活動、世界旅行などをとりあげ、後半において賀川が四日間の滞在中にデンマーク各地で行なった講演を概括している。

賀川豊彦は、独仏の周辺でいまだに国際紛争が継続し、イタリヤに独裁制が敷かれるなどしていた欧州には失望しても、国民高等学校のあるデンマークには、キリスト教の理念に基づいた連帯と協働の思想を育てられるという希望を抱き、励ましてさえたのだった。

(コペンハーゲン大学DNP特任教授)

▼34ページに書籍案内を掲載

エッセイ

一八六七年パリ万国博と日仏交流——ジャポニスムの端緒——

寺^{てら}本^{もと}敬^{のり}子^こ

現在、フランスと日本では、二〇二五年の万国博覧会の招致に向けた動きが活発化している。フランスは昨年一月、博覧会国際事務局（BIE）に正式に立候補を表明し、日本もまた大阪を中心に立候補に向けた具体的な動きを見せている。今から一五〇年前の一八六七年に、フランスでは第二回目のパリ万国博が開催され、ここに日本は初めて公式参加を果たした。万国博における最初の日仏の出会いを経て、現在、両国が新たな万国博の開催を模索しているのは、不思議な巡り合わせのようにも見える。

一八六七年パリ万国博は、フランスと日本にとって、さらに万国博の歴史にとっても、重要な意義をもつものであった。フランスでは、現在までに計六回のパリ万国博（一八五五年、一八六七年、一八七八年、一八八九年、一九〇〇年、一九三七）が開催されているが、このように同じ都市で複数回にわたって万国博が開催された例は他にない。小説家フロベールが「一九世紀の熱狂の種」と言い表しているように、パリはまさに万国博の主舞台であった。そうした「熱狂」の契機となったのが、一八六七年パリ万国博である。

最初の二つのパリ万国博は第二帝政期に開催されたが、その主要な組織者であったミシェル・シユヴァリエは、一八六七年パリ万国博の「成功」を公式報告書で高らかに宣言している。「成功」の根拠は、入場者数、出品者数、参加国の増加であり、当時の最大のライバル国であったイギリスのロンドン万国博を凌駕した点にあった。

こうした「成功」の記憶は、その後のフランスの政治と万国博の関係にも影響を及ぼす。普仏戦争の敗北のち、一八七〇年に成立した第三共和政において、新しい政権の安定、普仏戦争からの復興を内外に示す有効な手段として、政府は一八七八年パリ万国博の開催を企画するにいたったのだ。さらに、第三共和政期には、革命一〇〇周年を記念した一八八九年、一九世紀を締めくくると一九〇〇年へとパリ万国博の開催が続く。このようにしてパリ万国博の代表的な開催都市となり、一九二八年の国際博覧会条約の締結以来、博覧会国際事務局の本部はパリに置かれることになった。こうして、フランスは現在もなお、その運営に主要な役割を担っている。

一方、日本にとっても一八六七年パリ万国博は重要な意義をもっている。前述したようにこれは日本が主体的に参加した最初の機会であった。一九世紀にヨーロッパを中心に広がった貿易の自由化の波は、日本にも押し寄せた。一八五八年に幕府は米・蘭・露・英・仏の五カ国と修好通商条約を締結し、これ以降、一八六四年の条約勅許、一八六六年の改税約書を経て、日本人の対外貿易・海外渡航の自由が規定され、日本は世界市場にくみこまれていったのである。一八六七年パリ万国博への日本の参加は、まさにこうした貿易の自由化を背景に、日本と欧米諸国間の「人」と「物」の交流が広がる最初の契機となった。

このときの万国博の会場には、参加各国の代表者が集結し、日本からは將軍名代として徳川昭武（もろたけ）を代表とする幕府使節が参列した。この幕府使節には、渋沢栄一をはじめ、近代日本の基盤を作っていく人々の若き姿も見られる。さらに、幕府だけでなく、薩摩藩、佐賀藩、商人の出品も行われ、多くの日本人がフランスに渡航することとなった。万国博への参加は、明治に成立した新政府にも引き継がれ、一八七三年ウィーン万国博から、殖産興業の一環として、日本製品の輸出振興および先進諸国の先端技術の調査吸収を目的に、推進されていくこととなる。

「物」については、展示された日本の「養蚕、漆器、手細工物ならびに紙」に最高の賞であるグランプリのひとつが授与され、高い評価を得た。こうして、一八六七年パリ万国博でいわば「発見」された日本の美は、一八七〇年代に「ジャポニスム」の誕生

をもたらすこととなる。フランスの貿易統計を見ると、一八六七年を境に日本の「磁器」の輸入が大きく増加し、生糸に次ぐ日本からの主要な輸入品となった。「ジャポニスム」という新語は、一八七七年に刊行された『一九世紀ラルース大辞典』（第一増補）に初出し、「日本の器物に見られる装飾に類似した装飾の探求」と説明された。フランスで誕生した「ジャポニスム」は、このとき主に日本製の陶磁器など、日本工芸品の装飾に対する関心・研究を意味していたのである。

こうして一八七〇年代にはセーヴル製作所をはじめ、日本の動植物等のモチーフをデザインに取り入れた陶磁器が積極的に製作され、続く一八七八年パリ万国博においてジャポニスムは「熱狂」に達すると評されるにいたる。フローベールは「日本」について「この国ではすべてが磁器でできている」と言い表しているが、まさに磁器は「日本」のイメージを形成する重要な要素となった。フランスにおける日本磁器の輸入はその後も拡大し、一八八〇年代後半にピークを迎えることとなる。

一八六七年パリ万国博における日仏の出会い、ジャポニスムの端緒となった。それから一世紀半、二〇二五年の万国博覧会の招致、日仏交流一六〇周年を記念した「ジャポニスム二〇一八」の開催など、両国の「人」と「物」の交流は現在の政治や文化にも脈々と受け継がれている。

▼32ページに書籍案内を掲載

（跡見学園女子大学専任講師）

史料

探訪

(65)

徳川慶喜への不満

大政奉還と渋沢栄一

関^{せき}

根^ね

仁^{ひとし}

(渋沢史料館 学芸員)

銀行、製紙、紡績をはじめ五〇〇もの企業設立と育成に関わり、近代日本経済の基盤をつくつたと言われる渋沢栄一（一八四〇～一九三二）は、慶応三年に欧州へ渡つた。

この年、一五代將軍徳川慶喜の実弟・昭武^{あきたけ}が、パリ万国博覧会に派遣された。昭武は將軍名代としてパリ万博に出席し、その後は欧州各国を訪問することによって幕府の存在を国際的にアピールすることが目的だった。さらに昭武は将来の指導者となるべく、長期留学も兼ねていた。昭武に随行したのは、外国奉行の向山一履^{かずら}・傳役^{でんやく}の山高信離^{たかのぶり}・医師の高松凌雲、さらに田辺太一、杉浦愛蔵らである。当時幕臣であつた渋沢は「御勘定格陸軍附調役」という、庶務・会計のお役目を与えられて随行したのであつた。

徳川昭武は幕府を代表して、ナポレオン三世謁見式、ナポレオン三世招待の観劇会や舞踏会、万博会場の視察、万博褒賞授与式出席など、欧州宮廷外交という舞台において、幕府の存在を大いにアピールした。

さらに昭武は、スイス、オランダ、ベルギー、イタリア、イギリスなど各国元首の謁見を主目的とした欧州巡歴を無事に済ませ

た後、同年一二月より、将来日本の指導者となるべく学業に専念する。しかし、それも束の間。慶応四年一月二日、昭武たちが新春の祝辞を述べ合っている最中に日本から知らせが届き、一同は驚愕する。去る慶応三年一〇月に將軍・徳川慶喜が政権を朝廷に返上したというのである。

渋沢の公務日記である「巴里御在館日記」には、「夕五時半、御国御用状着、御政態御変革之儀其外品々申来る」（慶応四年正月二日条）とある。また渋沢は後年の回想（「雨夜譚」）において、當時の状況を次のように述べている。

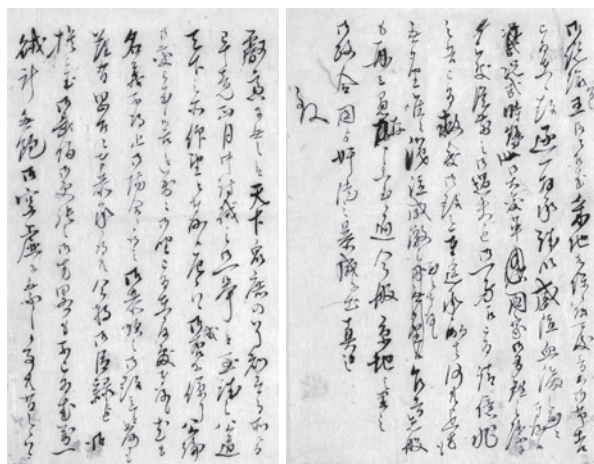
処で此歳の十月中に日本の京都に於て大君が政權を返上したといふ評判が仏国の新聞に出てから、様々の事柄が続々連載されて来るのを見たが、御旅館内外の日本人は勿論、公子に附添の仏国士官（中略）までが皆虚説であらうといつて、一向に信じませなんだが、独り自分は、兼ねて京都の有様は余程困難の位地に至つて居るから、早晚大政変があるに相違ないといふことは是までも既に屢々唱へて居つたことであるから、右の新聞紙を信用して他の人々にも其事を論弁しまし

たが（後略）

洪沢自身は政変の気配を感じていたらしいが、滞仏中の徳川昭武一行のうち多くは、將軍・慶喜による「大政奉還」を、にわか

に信じることはできなかったようである。

その後、現地の新聞報道、電信、日本から送られた御用状により、王政復古クーデター、鳥羽伏見の戦い、旧幕府軍の敗北、そして徳川慶喜の大坂城脱出と上野寛永寺での謹慎など、凶報が



徳川昭武書簡草稿綴（洪沢栄一筆）
（洪沢史料館蔵）

次々に飛び込んできた。昭武たちは進退を話し合うが、全貌が分からないために今後どのようにすべきかを決定することはできなかった。

三月一六日には、日本から昭武のもとに御用状、そして昭武に宛てた慶喜の書簡が到着する。これらには「大政奉還」以降の状況や、鳥羽伏見の戦いの顛末、さらには慶喜の「恭順」姿勢などがすべて、事実である旨が記され、昭武には留学継続が命じられたのであった。

滞仏中の洪沢は、慶喜の態度や行動に不満の意を抱き、その思いを昭武の名前で書簡に記して慶喜に宛てて送った。それを示す資料が、図版の「徳川昭武書簡草稿綴（洪沢栄一筆）」である。

洪沢の筆によるものであるが、「元来蒙昧之私、殊に幼年にて」、あるいは「いまだ少年之私」など、昭武の立場で記されている。この書簡草稿において洪沢は、王政復古クーデターを批判し、「正中討賊之御一挙は至誠之公道天下之所仰望と奉存候」と述べ、鳥羽伏見の戦いが「至誠の公道」であり、天下が望むものであると、戦の大義名分を主張する。しかしながら、「御帰府後は、御趣意御恭順に相替候とは、乍恐首尾御徹底無之儀と奉存候」と、慶喜が戦を始めたにもかかわらず、江戸へ戻った後に「恭順」を貫いていることについて、お考えが徹底していないと、慶喜の姿勢に不満を述べている。

さらに「神祖以降三百年之御鴻業一朝御自棄被為成、到底彼之黠略に御陥り被成終には御挽回も難被為成」というように、この

ような慶喜の態度は、徳川三〇〇年の歴史を自ら捨てるものであり、これから挽回することなどはできないと、慶喜を強く批判する。

実業家として活躍する以前、二八歳の若き洪沢が、主君である徳川慶喜に対して強い表現を用いながら率直な思いや不満を認めたものとして、非常に興味深い資料である。

幕末の激動は、昭武や洪沢らの人生を大きく変えるものとなったにちがいない。同年五月には新政府から昭武に帰国命令書が届いた。そのため長期留学は困難な状況となり、昭武は帰国を決断することになる。

洪沢は帰国後、静岡藩で活動したのち、民部省、大蔵省出仕を経て、明治六年に自ら創立に関わった第一国立銀行を足場に、実業家として日本の近代経済社会の基盤を築いていくのである。慶応三年の渡仏経験が、その後の洪沢の人生にどのような影響を与えたのか。具体的な分析が充分に行われているとは言い難いが、その影響は決して小さなものではなかっただろう。

本年は「大政奉還」から一五〇年、そして徳川昭武、洪沢栄一が渡仏して一五〇年という節目の年でもある。洪沢の旧邸跡地に建つ洪沢史料館（東京都北区・飛鳥山公園内）では、本年三月より「洪沢栄一、パリ万国博覧会へ行く」と題した企画展を開催している。小稿で紹介した「雨夜譚」の稿本や「徳川昭武書簡草稿綴」をはじめ、さまざまな資料から洪沢の欧州体験をたどる内容となっている。多くの皆様にご来館いただければ幸いである。

— MEMO —

公益財団法人洪沢栄一記念財団 洪沢史料館

【所在地】

〒114-0041 東京都北区西ヶ原2-16-1（飛鳥山公園内）
電話 03(3910) 00005
<http://www.shibusawa.or.jp>（財団ホームページ）

【交通】

JR京浜東北線「王子駅」より徒歩5分、地下鉄南北線「西ヶ原駅」より徒歩7分、都電荒川線「飛鳥山停留場」より徒歩4分、都バス「飛鳥山停留所」より徒歩5分

【開館時間】

午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

【休館日】

月曜日（祝日・振替休日の場合は開館）

祝日の代休

（祝日・振替休日の後の最も近い火曜日～金曜日の一日）
年末年始

【入館料】

一般 300円（240円）、小中高生 100円（80円）
*（ ）内は20名以上の団体料金

【企画展のお知らせ】

「洪沢栄一渡仏一五〇年 洪沢栄一、パリ万国博覧会へ行く」

〔第1期〕2017年3月18日（土）～同6月25日（日）

〔第2期〕2017年9月9日（土）～同12月10日（日）

*関連講演会、講座、シンポジウム、ミュージアムコンサート、トークショーなども開催予定。詳細は当館ホームページ、チラシ、ポスターなどをご覧ください。

オリンピックは日本文化の救世主か

まえ
ざき
しん
や
前 崎 信 也

「二〇二〇年のオリンピックに向けて」という言葉を近ごろよく耳にする。スポーツとは直接関係のない、筆者のような芸術・文化関係の人間からも、オリンピックはとても重要視されている。東京で四年に一度のイベントが開催される一か月半の間に、世界中が日本に注目し、文化のことを知りたいがり、さらにお金まで使ってくれるのだそうだ。そういう私も後述するGoogleや百貨店での展覧会プロジェクトに関するプレゼンテーションをすれば、「二〇二〇年に向けた」と言わずにいられない。毎年衰退を続ける日本の芸術・文化の世界で、オリンピックをきっかけとした「ジャポニスム」の再来を求める気持ちはみな同じ。さて、願い通りの結果を得ることはできるだろうか。

思い返してみると二〇〇八年と二〇一二年の会場となった北京とロンドンとは、どちらも私がかつて留学していた都市である。北京には中国語を学ぶために約一年半、ロンドンには大学院生として延べ六年を過ごした。どちらもオリンピック開催の三年程前までいたことになるが、世界から注目されるその時を目指して、人々の生活が変化していくのを実感する日々だった。ある日突

然、大半のタクシーが黄色いヒュンダイ製の新車になった北京。薄暗く汚かった地下鉄の駅が突然ステンレス張りの未来的な様相に変化したのはロンドンだった。東京だけではなく、日本各地の主要駅で再開発が進んでいくのを見るたびに、外見だけでも繕いたい気持ちは世界共通なのだと再認識する。そして、オリンピック後の北京の深刻な大気汚染や、イギリスのEU離脱のニュースを見ていると、二〇二〇年の後に日本にはどんな出来事が起こるのだろうと心配にもなるのである。

龍谷大学を卒業後、中国陶磁史を研究したいとロンドン大学SOAS(アジア・アフリカ研究学院)で修士課程に進んだのは二〇〇一年のことだった。そこで、現メトロポリタン美術館学芸員のジョン・カーペンター先生、大英博物館学芸員のニコル・ルーマニエール先生との出会いがあり、博士課程からは先生方の下で日本陶磁史専攻に変更した。大英博物館の日本陶磁器コレクションを題材として、近代日本が国際的な存在感を得るために、文化をどのように使ったのかがテーマ。つまり私の仕事は「文化の使い方」がキーワードである。そして、今の日本という国の「文化

の使い方」には常に疑問を感じている。

アメリカで美術館勤務をしていた期間も含めると、四〇年の人生の一〇年程を海外で過ごした。ありきたりな話になるが、どの国にいても「日本」という国について説明する日々だった。その経験は私に「日本がいかにマイナーな国か」ということを実感させてくれた。テレビを見ているとニュースで取り上げられることなどほとんどなく、日本がアジアのどこにあるかを知らない人の方が多かったかもしれない。日本の文化は、現代の日本人が信じているほどには、海外で素晴らしいと思われていない。「極東のちっぽけな島国に住んでいる、背が低く平たい顔の人たちが持っている変わった習慣」くらいの認識であるといった方がよい。それにもかかわらず、「優れた日本人観」をかかげ、キラキラした目で海外の人々に紹介しようとする活動がどれほどあることだろう。具体的に述べずとも、少なくともいくつかの事例は本誌の読者にも思い当たるのではないだろうか。

とはいえ、こうして文句ばかり言っているも始まらない。そこで、私が今進めている仕事は、世界の辺境に住む我々の文化の実像を正直に発信すること、そして、それを未来に繋げていくことのできる人材を増やすことである。

まずはGoogle Arts & Cultureを通じた日本の伝統工芸の海外発信。Google検索で「Made in Japan : 日本の匠」と検索していただければ、そこには一〇〇を超える数の、伝統工芸品の紹介が美しく大きな画像とともに展開される。外国からの旅行者がアク

セスすれば、すべて英語で表示されるというものだ。このプロジェクトは、Googleが「オリンピックに向けて」内容を充実させており、これまで延べ何百人という専門家・工芸家・組合の方々に協力いただいていた。大半のコンテンツ制作を担当してきたが、その作業に多くの大学生を関わらせている。その中から一人でも、将来の伝統工芸の世界発信を担う人材が生まれてくれればという想いからだ。

もうひとつの活動が、現代の工芸作家の方々との展覧会活動である。二〇一四年、銀座和光で「融合する工芸―出会いがみちびく伝統のミライ」展を開催した。「扱う素材が異なる若手作家が複数人でひとつの作品を作るとどんな作品ができるのか」がテーマである。以降の展覧会も好評を得て「オリンピックの年に」第四回展を予定している。ここで目標としているのは、海外の顧客に響く工芸ストーリーの構築だ。気鋭の若手作家、カメラマン、デザイナーとともに、海外で通用する日本工芸のコンセプトを作る。その先に工芸の、否、日本文化の生き残る道があると信じている。オリンピックの年、日本の文化・芸術は分岐点を迎えるだろう。多くのプロジェクトが二〇二〇年を目指して進められている以上、それが終われば一時的に目標を失い、公的な補助も減る。その時に生き残ることのできる作家の育成、そして新しい日本文化を発信する人材の養成、それこそがオリンピックを見据えた今の私の興味の中心なのである。

(京都女子大学生生活造形学科准教授)

▼話題の天皇退位後の称号「上皇」は「太上天皇」の略称とされていますが、『古代太上天皇の研究』（22頁掲載）はその歴史の変遷を明らかにしています。新聞各紙に書評掲載の『世界遺産と天皇陵古墳を問う』（22頁掲載）は世界遺産登録と天皇陵のあり方を考える最適な一書。サントリー美術館「絵巻マニア列伝」展に出陳されている、花園天皇の自筆日記を精巧に複製した『花園宸記』をミュージアムショップで販売中です。（I）

☆学会出店情報

小社刊行図書を展示販売

※日付は小社の出店予定日

国際東方学者会議東京会議（日本教育会館）

5/19（金）

美術史学会（関西学院大学）

5/21（日）

歴史学研究会（学習院大学）

5/27（土）・28（日）

日本民俗建築学会（京都大学）

6/3（土）

法制史学会（京都産業大学）

6/3（土）

日本医史学会（京都大学）

6/10（土）・11（日）

茶の湯文化学会（同志社大学）

6/10（土）

芸能史研究会（同志社女子大学）

6/25（日）

大阪歴史学会（関西学院大学）（予定）

6/25（日）（予定）

▼本来、お手許に届けられているはずの「藤原道長事典」、千年のしのエッセンス凝縮ゆえ、もうしばらくお待ちください。ていいたいむ収録ではまた貴重なお話がうかがえましたが、紙幅の都合で泣く泣く割愛。以上、何卒ご容赦ください。（大）

▼（関西では？）万博をめぐる議論が高まってきました。賛否両論ありますが、個人的には万博本を担当しながら過去の万博を見逃し続けてきたので、一回くらい見てみたいです。（M）

▼家に鉄道好きが約二名いるので本棚に交通新聞社さんの本が増殖中。二人にそこまで愛される出版社に軽々嫉妬しつつ、自分も魅力的な本をつくれるよう努力せねばと思います。（理）

▼本誌の広告頁のレイアウトをすっきりとしたものに変え、読み物頁では特集を組みました。今後いろいろな試みを行っていきます。（h）

▼近所の祇園白川は風情あり、結婚記念写真を撮る人がわんさか。3年後も同じ笑顔でいられるのは何組か？……ええ、大きなお世話です。（き）

▼表紙図版三十三間堂（カール・スコウゴールピーターセン『現代の日本から』一九二一年／『デンマーク人牧師がみた日本』より）※この図版は原書刊行時（一九二一年）以前に、通路を挟んで仏像が向きあうように合成されたものです（二〇一七年五月一日・編集部注）

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年2回（4・9月）刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうつうしん
鴨東通信

No.104

2017（平成29）年4月21日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

https://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

今尾文昭 (関西大学非常勤講師) 編
高木博志 (京都大学教授)

世界遺産と

天皇陵古墳を問う

四六判・三〇四頁／本体二、三〇〇円

仁徳天皇陵か、大山古墳か―
世界文化遺産登録に向けた動きのなかで浮かびあがる天皇陵をめぐる諸
問題―考古学の成果との齟齬、天皇陵指定の経緯、陵墓公開運動、社会
への広がり(ウェブ・教科書・報道)などを多角的に取りあげ、これか
らの天皇陵のあり方を考える。

読売新聞はじめ
各紙で紹介され
ました!

中野渡俊治 (花園大学准教授) 著

古代太上天皇の研究

3月刊行

A5判・二八八頁／本体五、四〇〇円

太上天皇とは、讓位した天皇のことである。
本書は、奈良時代から平安時代にかけての太上天皇を考察の対象とし
て、その成立背景・存在意義から、讓位後の天皇や臣下との関係に迫り、
太上天皇の地位の歴史の変遷を解明するとともに、太上天皇が、皇位継
承や天皇の正当性の問題に深く関わる様相を明らかにした。

〈内容〉

- 第一部 天智天皇と不改常典
- 第二部 奈良時代の太上天皇
- 第三部 平安時代の太上天皇



高木博志・山田邦和編

歴史のなかの天皇陵

各時代に陵墓がどうあり、社会のなかでどのように変遷してきたのか

本体二、五〇〇円

ジョン・ブリン編

変容する聖地 伊勢

不変の聖地か／変容する聖地か―伊勢神宮の変容する歴史をひもとく

本体二、八〇〇円

鹿内浩胤著

日本古代典籍史料の研究

史書・儀式書などの日本古代史の基本史料を対象に研究の方法論を提示

本体六、七〇〇円

倉本一宏編

日記・古記録の世界

日記とは、古記録とは何かを問う国際日本文化研究センターの共同研究

本体二、五〇〇円

吉川真司 (京都大学教授)
倉本一宏 (国際日本文化研究センター教授) 編

日本の時空観の形成

5月刊行予定

A5判・六〇〇頁／本体 一二、五〇〇円

周囲を海に囲まれ、四季がはっきりと分かれる地理的・構構的環境のなかではぐくまれた日本の伝統的な世界観はいつ、どのように形成されたのだろうか？

世界観とは空間観念のみならず時空観念をも含み込んで構成されると考えられるので、古代前期・古代後期・中世それぞれの時期における空間観念・時間観念について、さまざまな視角からの考察を試み、日本の時空観の形成・定着のプロセスを具体的にかつ実証的に明らかにする。

文献史学(日本古代史・日本中世史・アジア史)、考古学、歴史地理学、国文学の研究者による個性的な書き下ろし論文二四篇。

坂本亮太 (和歌山県立博物館学芸員)
末柄豊 (東京大学准教授) 編
村井祐樹 (東京大学助教)

高雄山神護寺文書集

3月刊行

A5判・六三〇頁／本体 一二、五〇〇円

真言宗の古刹高雄山神護寺は、関連する中世史料を多く伝え、空海筆の「灌頂曆名」や「文覚四十五箇条起請文」(いずれも国宝)が有名だが、ほかにも、二三巻一幅に整理された「神護寺文書」二七四通が重要文化財に指定されている。

神護寺に伝来した中世文書について、同寺現蔵分のみならず、寺外流出分についても能う限り探索・収集を行い、総数四九六点を編年して配列。これらに加えて、「伝法灌頂日記」「神護寺略記」などの記録類についても、記録編として収載する。寺僧集団、政治史研究、荘園研究など多方面に裨益する画期的な一冊。

隼谷寿著

平安王朝の葬送 死・入棺・埋骨

摂関・院政期の天皇と貴族の葬送における具体相を探り、相違点を考察

本体 三、七〇〇円

白幡洋三郎編

『作庭記』と日本の庭園

「日本庭園を通した古代・中世的自然観」の発見を試みる

本体 五、〇〇〇円

原田正俊編

天龍寺文書の研究

中世天龍寺関係文書、関連諸塔頭文書を翻刻・掲載、解説・論考も収録

本体 一四、〇〇〇円

鹿王院文書研究会編

鹿王院文書の研究

京都嵯峨の鹿王院に伝来する古文書を集成、翻刻。解題・研究篇を付す

本体 一三、〇〇〇円

斎藤英喜 (佛敎大学教授)
井上隆弘 (佛敎大学研究員) 編

神楽と祭文の中世

変容する信仰のかたち

A5判・三九〇頁／本体八、〇〇〇円

「民俗芸能」と呼ばれ、古代以来伝わるものとされる「神楽」。それらの深層を探ると、そこには混沌とした「中世」の信仰のかたちが現れる。
この中世の信仰と思想を伝える「祭文」を中心に、中世神楽および関連する陰陽道・密教・アジアの巫俗の世界を読み解く意欲作。

〈内容〉
第一部 陰陽道・密教・中世神話・アジア
第二部 生成する祭文の世界
第三部 中世神楽の現場へ



小西瑞恵 (元大阪樟蔭女子大学教授) 著

日本中世の

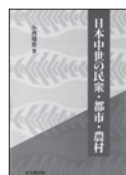
民衆・都市・農村

3月刊行

A5判・四二二頁／本体八、五〇〇円

都市とそこに生きた民衆、武士、悪党、女性、そしてキリスト教徒の姿を再検討し、これまでの理解とは異なった中世の社会を甦らせる。
前著『中世都市共同体の研究』に続く中世史研究の集大成。

〈内容〉
第一部 中世都市論―大山崎と堺を中心に
第二部 畿内近国の荘園と武士団
第三部 都市と女性・キリスト教



斎藤英喜編

神話・伝承学への招待

神話や伝説などを総合的・学問的に研究する「神話・伝承学」への入門書

本体二、三〇〇円

山下克明著

平安時代陰陽道史研究

陰陽道のあり方、陰陽師らの活動の実態やその浸透などを明らかにする

本体八、五〇〇円

小西瑞恵著

中世都市共同体の研究

都市共同体の全体構造や多様な都市住民の実態に迫る

本体六、四〇〇円

浜口誠至著

在京大名細川京兆家の政治史的研究

在京大名細川京兆家を通して、戦国期室町幕府政治の構造的特質を解明

本体六、五〇〇円

石井伸夫 (徳島県立鳥居龍蔵記念博物館学芸員)
仁木宏 (大阪市立大学教授) 編

守護所・戦国城下町の 構造と社会 阿波国勝瑞

3月刊行

A5判・三六八頁／本体六、六〇〇円

藤井譲治 (京都大学名誉教授) 編

織豊期主要人物居所集成

〔第2版〕

好評重版

B5判・四八〇頁／本体六、八〇〇円

仁木宏著 京都の都市共同体と権力

中世京都の都市構造モデルを前提に、町(ちょう)の成立を読み解く
本体六、三〇〇円

橋詰茂著

瀬戸内海地域社会と織田権力

制海権をめぐる抗争など、瀬戸内海・四国をとりまく実態を明かす
本体七、二〇〇円

戦国時代、百年以上にわたり阿波国(現在の徳島県)の中心地であった守護町「勝瑞」。
阿波国は、中世後期から近世にかけて、権力主体が変遷したにもかかわらず、ずっと一国単位で歴史が変遷する。その中心は勝瑞から徳島へ引きつがれた。これを「阿波モデル」として全国の城下町研究に提示する。

〈内容〉

第1部 守護町勝瑞の構造
第2部 守護町勝瑞と戦国社会



*居所の確定は、従来個々の研究者が、特定の人物、特定の時期に限って行ってきたため不完全であり、公にされることもきわめて少なかった。本書は、多くの研究者が複数の人物を取り上げ、居所情報を複眼的に確定した成果。

*各章は「略歴」と「居所と行動」で構成され、現在知りうる限りの居所情報を編年で掲載。

*政権の中心人物、政権中枢の人物、有力大名、有力武将、僧侶・文化人、公家、政権に関わる女性たち、総勢25名を収録。

*辞書的な利用はもちろん、通覧すれば秀吉の天下統一の道程や戦国武将の動静、同時代人たちの交流を詳細に追える。

小川信著

中世都市「府中」の展開

詳細な個別研究を集大成、中世都市・諸国府中の全体像を明らかにする
本体一一、〇〇〇円

藤井譲治著

近世史小論集 古文書と共に

入手困難な日本近世政治史論考などを集め、学術研究の軌跡を振り返る
本体六、〇〇〇円

片山正彦 (佛教学非常勤講師) 著

豊臣政権の東国政策 と徳川氏

2月刊行

A5判・二五八頁／本体 六、〇〇〇円

前田勉 (愛知教育大学教授) 著

江戸教育思想史研究

A5判・五九六頁／本体 九、五〇〇円

エリート教育か、藩士全体の教養の底上げか――。
教師による講釈か、自由闊達な議論を認める集団読書 (会読) か――。
学問が出世に結びつかない身分制社会の近世日本において、ようやくくつ
くらはじめた学校はさまざまに展開する可能性があった。学ぶ理由が
明確でないなかで、学校はいかに生まれ、人々はそれになにを求めたの
か。学習の方法、教育の目的に注目することで、官学／私学、儒学／国
学／蘭学といった枠組みを超え、17世紀から明治初期までを見通し、江
戸教育思想史に新たな地平を拓く。

近年発見された「九月一七日付家康書状」。そこから新たに見えてきた
豊臣と徳川の関係とは……。

本書は、新出史料の分析を中心に、豊臣・徳川の政治的関係を見直しつ
つ、豊臣政権の東国政策の一端を明らかにしようとするものである。
第五回「徳川奨励賞」を授与された研究をもとに、
これまで「惣無事」論や「取次」論を語る際に前
提とされてきた通説をくつがえすことを試みた意
欲作。



笠谷和比古著

関ヶ原合戦と近世の国制

徳川家康の政権抗争と近世天皇制との関係を論じる

本体 五、八〇〇円

藤井譲治著

徳川将軍家領知宛行制の研究

徳川将軍家の領知宛行制の形成過程とその特質を明らかにする

本体 七、五〇〇円

笠谷和比古編

徳川社会と日本の近代化

徳川日本の文明史的力量に着目した、多角的な研究論文25本

本体 九、八〇〇円

笠谷和比古編

一八世紀日本の文化状況と国際環境

18世紀日本文化の独自性にみちた発展・展開を論じる23篇

本体 八、五〇〇円

左記3点 待望の復刊！

※総合教育センター専売商品につき、ご注文はフリーダイヤル 0120-435-288 まで

宗田 一 著

図説 日本医療文化史

B4判・四九四頁／本体五五、〇〇〇円

太古の昔から人類の生活史の中で不可欠な医療の歩み。本書は、古代から近代までの医学・医療の発達と展開過程を広く文化史のなかで捉えた医学史研究第一人者ならではの研究成果。いわば医療から見た日本文化史。図版を豊富に挿入し、貴重な医療文化財に触れることができる。巻末には参考文献・収録写真(図版)一覧・索引(人名・事項)を付した。オールカラー。

京都府医師会 編

京都の医学史

〔全2冊 本文篇・資料篇〕

菊判・総二一四二頁／本体三八、〇〇〇円

古代医学から中国医学、仏教医学、オランダ医学、そして近代医学、さらに解剖、眼科、痘科、産科、鍼灸、本草、宮廷医家、町医師、看護と、昔から多くのすぐれた医家を輩出した京都の医学史を体系的に編纂。資料篇には、究理堂の資料と解説・医家門人帳・京都の医事年表・良医名鑑を収める。

第34回毎日出版文化賞受賞

増田知正・呉秀三・富士川游 選集校訂

日本産科叢書

菊判・一三三三頁／本体二〇、〇〇〇円

明治28年に産科史珠玉の原典を網羅・集大成したものの復刻。中條流産科全書、濃洲乗付流産方、瀬尾流産方から始め、賀川学統前後、蛭田学統など、全59点の原典史料を収める。日本産科学史考として逸脱しているものは未刊本の訳書其他数部にすぎない。江戸期産科書のエンサイクロペディアである。

上田純一 (京都府立大学特任教授) 編

京料理の文化史

3月刊行

四六判・三五二頁／本体二、三〇〇円

一般社団法人 和食文化国民会議 監修

和食文化ブックレット

第1期 全10巻

A5判・九六頁／(各)本体九〇〇円

最新刊(第6巻) 3月刊行

熊倉功夫編

日本の食の近未来

8名の研究者による、食文化の近未来についての共同研究成果

本体二、三〇〇円

西岡正子編

老舗に学ぶ京の衣食住

技と伝統を守り継ぐ老舗の主人自らの言葉で綴る「本物の京都学」

本体一、九〇〇円

和食、とくに京料理の形成を、文化的な側面からとらえ、新たな京料理の見方を提案する。

〈内容〉

総論 京料理の文化史／古代の「食」と文学表現―木簡・古事記歌謡・万葉集歌／中世の日記から見る和食／フロイス『日本覚書』にみる東西食文化／「つくりもの」あるいは「見立て」としての精進料理／黄檗宗の伝来と普茶料理／近世京都の料理屋／近世京都・山城国の産物と鮎／宇治茶について知っていますか／食と地域／食から考えるアメリカーグローバリゼーションと和食

和食の典型的なスタイル、和食文化というべき食べ方、しつらい、マナーなど、和食文化国民会議が総力をあがったブックレットシリーズ。

〈内容〉

- | | |
|---------------|--------------------|
| 第1巻 和食とは何か | 第6巻 食材と調理 |
| 第2巻 年中行事とときたり | 第7巻 うまみの秘密「5月刊行予定」 |
| 第3巻 おもてなしとマナー | 第8巻 ふるさとの食べもの |
| 第4巻 和食と健康 | 第9巻 和菓子と日本茶(仮) |
| 第5巻 和食の歴史 | 第10巻 和食と日本酒(仮) |

※太字は既刊

日本・紙アカデミー編

紙―昨日・今日・明日

紙の文化を多角的に論じる、日本・紙アカデミー25年の軌跡

本体二、〇〇〇円

小泉和子編

茶と室内デザイン

豊富なカラー図版とともに、茶道と室内デザインの関係性を考える一書

本体三、五〇〇円

竹内順一 (東京藝術大学名誉教授)

岡佳子 (大手前大学教授)

ルイス・コート (フリーア美術館学芸員)

アンドリュー・ワツキー (プリンストン大学教授)

編

「千種」物語

二つの海を渡った唐物茶壺

A5判・二八四頁／本体三、二〇〇円

13〜14世紀頃に中国で生まれたひとつの壺が、東シナ海を渡って日本に伝わり、16世紀に茶の湯の道具として「千種」の銘を与えられ、名物となった。やがて21世紀にはもうひとつの海、太平洋を渡り、アメリカ合衆国ワシントンDCにあるフリーア美術館 (管理運営・国立スミソニアン協会) に収められた——唐物茶壺「千種」の歴史的な変遷を経系に、「千種」をめぐる多様な文化現象を緯系に織りなされた、壮大な物語。日本、アメリカ、中国の研究者による、歴史、美術、考古学、科学などの多角的な分野を網羅した最新の研究成果を収録。

熊倉功夫 (国立民族学博物館名誉教授) 著

熊倉功夫著作集「全7巻」

A5判・平均四八〇頁／(各) 本体七、〇〇〇円

伝統とは、美とは、日本とは——。
文化史の諸領域にわたり茶の湯を軸として、鋭敏な感覚で鮮やかに本質を明らかにし、分野を軽々と飛び越えて新たなパースペクティブを示し続けてきた著者が、自選によってまとめる七つの小宇宙。

〈内容〉

- 第一巻 茶の湯——心とからだ 第五巻 寛永文化の研究「5月刊行予定」
- 第二巻 茶の湯と茶人の歴史 第六巻 民芸と近代
- 第三巻 近代茶道史の研究 第七巻 日本料理文化史
- 第四巻 近代数寄者の茶の湯

茶の湯文化学会編

講座 日本茶の湯全史「全3巻」

中世・近世・近代と、茶の湯を通覧する、まったく新しい概説書

(各) 本体二、五〇〇円

中村静子著

元伯宗旦の研究

「利休の孫」元伯宗旦の姿を、多数の史料を読み解き複眼的に究明する

本体七、八〇〇円

依田徹著

近代の「美術」と茶の湯 言葉と人とモノ

千利休と岡倉天心に注目し、明治以降の茶道具の評価を捉え直す

本体六、四〇〇円

齋藤康彦著

近代数寄者のネットワーク

茶の湯を愛した実業家たち

本体四、〇〇〇円

スムットニー祐美 (関東学院大学非常勤講師) 著

茶の湯とイエズス会宣教師 中世の異文化交流

四六判・二四八頁／本体 四、六〇〇円

茶の湯を宣教の糸口に。

戦国時代、来日したイエズス会宣教師たちは日本の文化や人々の生活習慣などの情報収集を行い、布教の糸口として当時盛んに嗜まれていた茶の湯に目を付ける。

茶の湯とキリスト教との関係を、ローマイエズス会文書館より収集した本邦初公開の史料をもとに詳細に明らかにする。

平成28年度茶道文化学術奨励賞受賞



小堀宗実 (遠州茶道宗家十三世) 著

新・小堀遠州の書状

3月刊行

B5判・一六六頁／本体 四、二〇〇円

「綺麗さび」とよばれる新たな境地を茶道にもたらした小堀遠州。

その書状からは、古田織部、松花堂昭乗、伊達忠宗ほか、当時の高名な文化人や大名などとの広いネットワークがうかがえる。

紫衣事件で配流の身となった澤庵宗彭、処罰を主導した金地院崇伝の双方とも親しく、それゆえの苦悩など、江戸初期の社会とそこで生きた遠州の人となり、遠州茶道宗家十三世小堀宗実家元の解説により読み解く。

竹本千鶴著

織豊期の茶会と政治「オンデマンド版」

織田・豊臣政権における支配構造の一側面を茶会の場から明らかにする

本体 九、五〇〇円

名和修ほか監修／川崎佐知子校訂

御茶湯之記 予楽院近衛家熙の茶会記

近衛家熙が自家に客を招いて催した茶会の晩年24年間の記録

本体 一五、〇〇〇円

ノーマン・ワデル著 樋口章信訳

売茶翁の生涯

好評増刷

禅僧で煎茶の祖と仰がれる高遊外売茶翁の生涯をまとめた初の伝記

本体 三、五〇〇円

谷見・矢ヶ崎善太郎校訂

茶譜「全2冊」

西尾市岩瀬文庫蔵本を底本とし、茶譜(全18冊)を全編活字化

本体 二〇、〇〇〇円

園城寺の仏像編纂委員会 編

園城寺の仏像

第二巻 平安彫刻篇Ⅰ

4月刊行

A4判・一九六頁／本体 一八、〇〇〇円

三井寺として親しまれている園城寺の開祖、智証大師の生誕一二〇〇年を記念して、園城寺および縁の寺に所蔵される仏像を網羅的に収録するシリーズ全四巻の第二巻。
秘仏・如意輪観音坐像ほか平安期に生み出された彫刻を収録。図版はすべてカラー掲載。

〈内容〉

第一巻 智証大師篇
第三巻 平安彫刻篇Ⅱ
第四巻 鎌倉・桃山彫刻篇
本体 一二、〇〇〇円(既刊)
予価 一六、〇〇〇円
予価 一六、〇〇〇円
予価 一六、〇〇〇円

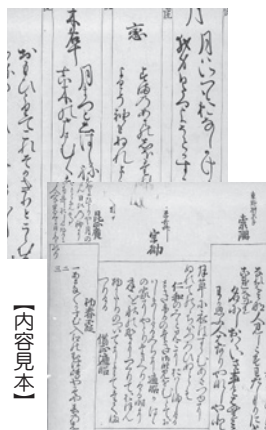
増田孝(愛知東邦大学教授)
日比野浩信(愛知淑徳大学非常勤講師) 編

慶安手鑑

1月刊行

B5判・三五二頁／本体 四、〇〇〇円

古筆家初代・古筆了佐によつて、慶安四年(一六五二)に版行された、大型木版本『御手鑑』の影印・釈文(翻刻)・筆者略伝・索引をコンパクトに収める。収録点数は古筆切一三六点、短冊六一六点。



【内容見本】

田島公(東京大学教授) 編

禁裏・公家文庫研究 第六輯

5月刊行予定

B5判・四一六頁／本体 一五、〇〇〇円

これまで勅封のため全容が不明であった東山御文庫本を中心に、近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収蔵本に関する論考・史料紹介・データベースを収載するシリーズの第六輯。

芳澤勝弘(花園大学顧問) 編著

東陽英朝 少林無孔笛訳注(一)

4月刊行

A5判・六二四頁／本体 一三、〇〇〇円

妙心寺四派の一つ、聖澤派の開祖・東陽英朝禪師(1428-1504)の語録『少林無孔笛』六巻を現代語訳し、詳細な注を付す。晦渋な修辭が続く、難解で知られた「文字禪」の代表である語録を現代に甦らせる。全三冊。

寺本敬子 (跡見学園女子大学助教) 著

パリ万国博覧会と ジャポニスムの誕生

4月刊行

A5判・三七〇頁／本体六、五〇〇円

万国博覧会の熱狂、それを彩るジャポニスム――。

舞台は19世紀後半のフランス・パリ。一八六七年パリ万博で日本は最初の公式参加を果たし、続く一八七八年パリ万博でまさに開花する。この時代に、いかなる「日本」イメージが形成されていったのだろうか。

ふたつのパリ万博を舞台に交差する国家の思惑、人と物。

日仏両国の史料を駆使し、開催国フランス、参加国日本、パリの観衆、三者の相互作用を通じてジャポニスムの誕生を解き明かす。

モノとモノ、コトとコトの関係も結局は人間が中心にある。

ここで考えたいのは、人を中心とした、近代京都の美術工芸にまつわるヒト・モノ・コトのネットワークである。点でも線でもない、ネットワークという「面」からアプローチするところみは、他の地域の近代を考えるときにも重要な手がかりになるだろう。

ビックネームだけでは構築されない美術工芸の現場をあぶり出すことにより、よりヴィヴィッドな美術史が見えてくる。

京都近代美術工芸の ネットワーク

4月刊行

A5判・三五二頁／本体二、五〇〇円

並木誠士・清水愛子・青木美保子・山田由希代編

京都伝統工芸の近代

京都の美術・工芸がどのような変容を undergone 現在にいたるかを解説

本体二、五〇〇円

デザイン史フォーラム編

国際デザイン史 日本の意匠と東西交流

デザイン史における日本と西洋諸国との交流を探索する56篇

本体二、九〇〇円

藤田治彦責任編集

アーツ・アンド・クラフツと日本

デザイン・工芸・美術・社会・産業・環境・生活など立体的な関係を考察

本体二、九〇〇円

藤田治彦責任編集

近代工芸運動とデザイン史

各国における芸術分野での歴史・重要な動向を様々な点から解き明かす

本体二、九〇〇円

中川理 (京都工芸繊維大学教授) 編

近代日本の空間編成史

4月刊行

A5判・五五〇頁／本体七、八〇〇円

わが国戦前の空間はどのように編成されてきたのか――。
日本の近代化過程という歴史全体のなかで議論することを掲げ、インフラストラクチャーと制度や政治、あるいは共同体などのかかわりを考究。第一線の研究者が、広くわが国の空間変容の実相を描き出す。

〈内容〉

- 第Ⅰ部 切断か継続か
- 第Ⅱ部 併存する統治
- 第Ⅲ部 統制的システムの構築
- 第Ⅳ部 システムの内と外
- 第Ⅴ部 非公共の回収

白幡洋三郎 (中部大学特任教授)
劉建輝 (国際日本文化研究センター教授) 編著

異邦から／へのまなざし

見られる日本・見る日本

5月刊行

A5判・二五六頁／本体二、八〇〇円



国際日本文化研究センター所蔵の明治／戦前期日本内地・外地絵葉書などを素材に、近代以降、日本とその周縁をめぐる「異邦」のまなざしの往還と交錯を描出する。オールカラー画像約五〇〇点。
日文研創立三〇周年記念企画。

〔予定目次〕

- 第Ⅰ部 見られる日本 自然／建築／職業／生活／娯楽／遊技／行事／女性と子ども／物語
- 第Ⅱ部 見る日本 朝鮮半島／旧満州／旧蒙疆地域／中国北部／中国南部／満州・大陸風俗／台湾／南洋
- 第Ⅲ部 見られる日本・見る日本

中川理著

京都近代の記憶 場所・人・建築

いまある京都の魅力はどのように作られたのか、写真とともに綴る

A5判・一八四頁／本体二、二〇〇円

小野芳朗編著

水系都市京都 水インフラと都市拡張

近代京都の都市史を水インフラという視点から論じる

A5判・三一〇頁／本体五、四〇〇円

三宅拓也著

近代日本〈陳列所〉研究

明治／昭和戦前期における公共陳列施設の実態を明らかにする

A5判・六四〇頁／本体七、八〇〇円

岡本貴久子著

記念植樹と日本近代

林学者本多静六の思想と事績

A5判・五六八頁／本体九、〇〇〇円

本井康博 (元同志社大学教授) 著

新島襄の師友たち

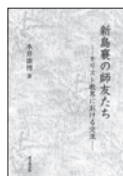
キリスト教界における交流

A5判・四六〇頁／本体 四、二〇〇円

新島襄をめぐる人々の中からキリスト教にゆかりの深い人物、なかでも新島が属した「組合教会」(会衆派)という自派の関係者から30余名をとりあげた「交遊録」。

〈内容〉

- I 新島襄
- II アメリカ人との交流
- III 組合教会派との交流
- IV 他教派との交流
- V 家族(資料と講演)



長島要一 (コペンハーゲン大学特任教授) 訳・編注

デンマーク人牧師が みた日本 明治の宗教指導者たち

四六判・三三八頁／本体 三、七〇〇円

一九二一(明治44)年来日したデンマーク人牧師、カール・スコウゴー・ビーターセンによる日本印象記『現代の日本から』を本邦初公刊。無名の牧師によって誤訳された日本を知ること、異文化理解への再考をせまる。

〈内容〉

解題 「現代の日本から」成立の背景と本書の着眼点／デンマークにおける日露戦争後の日本観／カール・スコウゴー・ビーターセンと日本への視察旅行
カール・スコウゴー・ビーターセン『現代の日本から―個人的な印象―』(原書翻訳)

谷川穰著

明治前期の教育・教化・仏教

「オンデマンド版」

本体 七、五〇〇円

高橋文博著

近代日本の倫理思想 主従道徳と国家

主従道徳に着目し、近代日本における倫理思想の特質を探る

本体 五、五〇〇円

田中智子著

近代日本高等教育体制の黎明

交錯する地域と国とキリスト教界

本体 七、〇〇〇円

小股憲明著

明治期における不敬事件の研究

豊富な実例を整理・検討し、明治期の不敬事件を網羅した大著

本体 一三、〇〇〇円

稲賀繁美 (国際日本文化研究センター教授) 編

海賊史観からみた

世界史の再構築

交易と情報流通の現在を問い直す

3月刊行

A5判・八五二頁／本体 一四、〇〇〇円

文化交流・交易全般における「海賊行為」を総合的に再検討することを目指すとし、国際日本文化研究センターで行われた共同研究の報告書。狭義の美術史、文化史、交易史のみならず、経済史、国際法、情報流通論などの分野の知見をも学際的に取り入れ、国際的視野から葛藤の現場を解明する。



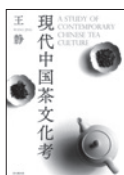
王静 (大阪観光大学専任講師) 著

現代中国茶文化考

2月刊行

A5判・三〇六頁／本体 五、五〇〇円

いまや現代中国のアイデンティティともいえる、茶文化。その茶文化を創造し、再構築した政治的・経済的文脈とはどのようなものであり、それはどのようなプロセスをへて、さらにはそこにいかなる力がはたらいているのか。ひいては、茶そのものがもつ可能性とは。中国の現代茶文化を映し鏡として、文化が本来もっている意味や力を見つめ直す。



佐野真由子編

万国博覧会と人間の歴史

万国博覧会から人間の歴史をみる、国際日本文化研究センター共同研究

本体 九、二〇〇円

園田英弘編著

逆欠如の日本生活文化

日本にあるものは世界にあるか

本体 三、八〇〇円

陳凌虹著

日中演劇交流の諸相 中国近代演劇の成立

清末民国初期における日中演劇界の緊密な連携関係を論じる

本体 八、〇〇〇円

工藤貴正著

中国語圏における厨川白村現象

隆盛・衰退・回帰と継続

本体 六、〇〇〇円

オンデマンド復刊

受注生産のため、出荷に一週間ほどいただきます

2016年冬〜2017年春 復刊 ※表示価格は税別

八瀬童子 歴史と文化

宇野日出生著「初版二〇〇七年」

四、五〇〇円

戦国期権力佐竹氏の研究

佐々木倫朗著「初版二〇一一年」

六、一〇〇円

莊園制成立史の研究

川端新著「初版二〇〇〇年」

一〇、六〇〇円

中世畿内における都市の発達

永島福太郎著「初版二〇〇四年」

六、八〇〇円

中世民衆生活史の研究

三浦圭一著「初版一九九〇年」

九、〇〇〇円

孝子伝・二十四考の研究

黒田彰著「初版二〇〇一年」

四、二〇〇円

日本近世地誌編纂史研究

白井哲哉著「初版二〇〇四年」

九、二〇〇円

*復刊希望がありましたらご用命ください！
(必ずしもご希望にそえるとは限りません)

ネット書評サポーター募集

ご自身のブログやSNSで本書の書評コメントを書いていただける方に、書籍を献本します。

◎応募要項◎

募集書目…異邦から／へのまなざし

募集内容…対象書籍は右記1点(33頁掲載)。

募集人数は各3名、締切は5月31日です。

字 数…特に制限ませんが最低でも800字以上はお書きいただくようお願いいたします。

発表媒体…ご自身のブログ、Facebookなど、インターネット上で一般公開されているもの。

アマゾンのレビューなどネット書店のレビューは対象外です。特定の範囲にしか公開されていないもの、一時的にしか公開されないものは除きます。

Facebookの場合は、投稿の公開範囲を「公開」にしている必要があります。

発表期限…書籍送付後3か月以内に公開してください。

申込方法…メール(mub@shibunkaku.co.jp)・FAX・郵送で左記の項目をお知らせ下さい

★書評していただける書籍

★発表する媒体

★申込に当たってのアピールポイント

★お名前・ご所属・書籍お送り先住所・電話番号・メールアドレス

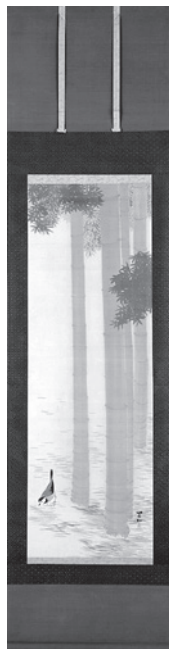
審査結果の通知…各書籍募集締切後、結果をお知らせします。

審査の内容についての問い合わせには応じられませんのでご了承下さい。

美の縁

び

よすが



まっすぐに伸びる数本の竹と、その麓に敷かれた竹葉をつつく一羽のヤマガラ。尾羽をピンとあげたその姿はなんとも愛らしく、人気のない竹林の中で小さな生命の音が響いてくるようです。歳寒三友のひとつである竹は、寒さに耐えて成長を続けることから、節操を曲げない強い精神性を示すとして、中国の文人たちの間で尊ばれました。日本では松竹梅という縁起物としてのイメージが定着していますが、もともと中国では、「清廉潔白」という文人の生き方そのものを象徴する重要な存在であったのです。

作者である今村紫紅は、明治時代末から大正時

❖ 竹に山雀図 ❖ 今村紫紅

代にかけて、安田靉彦や小林古径とともに日本画の近代化に尽力し、後進の画家たちに大きな影響を与えたことで知られます。当時岡倉天心を中心に横山大観・菱田春草らが推し進めた日本画の革新運動に触発された紫紅は、自身も大和絵の技法に写実性を融合するなど表現の模索に取り組みました。

何気ない自然の景色を描いた本作品ですが、しなやかに上方へ伸びる竹には、日本画を新しい方向へ導こうとする紫紅自身の強い意志が込められているのかもしれません。

(思文閣美術事業部・糸永はづき)



美術品の架け橋、 思文閣大入札会

年四回開催している思文閣大入札会。
お客様のもとで受け継がれた価値ある美術品を、
求めている方へとお引き合わせします。

ご出品をご希望の方は、まず査定のお申し込みを

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
satei@shibunkaku.co.jp



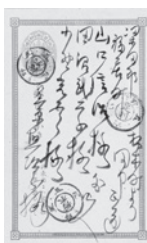
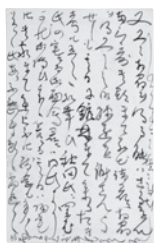
我々思文閣は日本の優れた文化を
育み、伝え、広める事により一人でも多くの人々に
感動と豊かな心を与え続ける企業を目指します。

SHIBUNKAKU

思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録



田中正造関係資料
一括

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・
古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの
商品を取り扱っております（年4回程度
発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部
までお問い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp



小川待子展

Ogawa Machiko Exhibition

思文閣京都本社 2017.5.13[土]ー28[日]
思文閣銀座 2017.6.1[木]ー11[日]

SHIBUNKAKU

思文閣

〒605-0089

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
tel: 075-531-0001 gallery@shibunkaku.co.jp